

英語における名詞の可算, 不可算に関する予備的考察

熊谷 哲孝

平成22年10月30日受理

A Preliminary Consideration of Countable and Uncountable Nouns in English

Noritaka KUMAGAI

目次

はじめに

1. 石田 (1998) における「可算名詞の不可算名詞化」について
2. 石田 (1999) における「有界性の判断基準」について
 - 2.1. 基本パターン (i) an area of について
 - 2.2. (iv) an instance of というパターンについて
3. 本稿のまとめと今後の研究に向けての展望

はじめに

本稿では英語の名詞の性質の1つである, 可算 (countable), 不可算 (uncountable) の決定要素について予備的考察を行う。我々日本人が英語を学習する際, 母語である日本語との違いに戸惑うことがある。例えば, 単語のスペル, 語順, 規則動詞, 不規則動詞の変化形などは, そのまま暗記するしかない類であろう。ところが英語の名詞でいわゆる, 「数えられる名詞」と「数えられない名詞」の分類はどうだろうか。ここでの「数えられる」, 「数えられない」は, 可算, 不可算に対応する。名詞の可算, 不可算の判別については, 一般的 (例えば, いわゆる「学校文法」の範疇) には, 可算名詞はその特徴として「単数形と複数形を持つ」, 「単数形には a/an を付加することができる」ということが挙げられ, 不可算名詞は原則として複数形にすることができない¹⁾ということがその特徴として挙げられている。しかしこれらの区別の仕方では, 名詞について, 個別的に可算であるのか不可算であるのかをいちいち覚えておく必要があるた

め, 英語学習者にとって覚えるべき情報量が膨大になってしまう。このことは結果として, 英語を第二言語²⁾として学習する者にとって非常に過度な負担を強いられることになってしまう。そこで原点に立ち返って, 言語は人間同士が意思伝達を行う手段である以上, そのシステムに不要な要素を取り入れることは, 通常ありえないと推測すると, 名詞を可算, 不可算に区別することは日本語には必要のないことであっても, 英語に関しては必要なことなのかもしれない。つまり, 少なくとも英語母語話者には, 名詞を可算, 不可算で区別する認知的営みが存在するのではないかと考えられる。

英語母語話者が名詞の可算, 不可算の判別について, どのような基準で行っているのかということを検討することは, 我々のように英語を第二言語として学習する者にとって, その学習効果を上げることに寄与するであろう。この検討にあたり, 判別の基準となる概念は言語が話者同士の意思伝達を行う手段であるという観点からしても複雑な構成を成しているものではなく, ある程度, 直感的に判断決定できるもので

あると予測できる。さらに言えば、英語話者にとっての「ものの見方」が名詞の可算、不可算の決定に大きく反映していると言えるだろう。このことについては、石田 (1998, 1999) がそれぞれ、「可算名詞の不可算名詞化」、そして「有界性 (boundedness)」という判断基準の概念を提示することによって言及している。石田 (1998) は、名詞の可算、不可算の決定について次のような見解を示している。

名詞表現は、外界の指示対象を話者と切り離された状態にある客観的な存在として単純にそのまま言語化したものではなく、話者が自身の認知を通して主体的に解釈した上で言語化したものである。

(石田 1998: 11)

これは名詞の可算、不可算の決定基準は名詞のそのものの意味的性質よりも、話者の名詞の捉え方、認知の仕方が大きくかかわってくると考えられる。さらに、その名詞表現が発話された場面、話者の置かれた状況という要素もかかわってくる可能性がある。

そこで次節以降から、石田 (1998, 1999) における観察を概観しながら検討を加えて、本稿のまとめと今後の研究の展望を示す。

1 石田 (1998) における「可算名詞の不可算名詞化」について

学校文法の範疇では、名詞は可算、不可算のいずれかに分類されるとしている。しかし英和辞典を眺めてみると、多くの名詞には可算、不可算のいずれの意味解釈もあることが分かる。そこで本節の本論に入る前の導入として、本節の表題としている「可算名詞の不可算名詞化」とは逆の現象である、「不可算名詞の可算名詞化」の1例として、名詞 *cola*³⁾ を紹介する。

cola は *water* などの同じ液体という物質の性質から一般的に不可算名詞として扱われる。そのため例えば喫茶店などで、「コーラを2

つ下さい。」と注文する場面では、“Two glasses of cola, please.” という表現形式が用いられる。これは前述の通り、*cola* という名詞が一般的に不可算名詞という扱いのため、代わりにその液体を入れる容器、つまりこの場合は *glass* という可算名詞を用いて数えていると考えられる。こまでは、学校文法としての基本的な説明となる。しかし実際には、“Two colas, please” という不可算名詞を可算名詞化した表現形式が十分に(問題なく)通用する。これは恐らく、*cola* は少なくとも *glass* や *can* のような容器に入っ
て供されることが当然である英語話者の認知判断が働いた環境設定の1つであると考えられる。不可算名詞の可算名詞化は、容器や集合単位のような「有界性」を示す要素が明白であれば、比較的容易に起こりうると考えてもいいかもしれない。

さて、本節の主題である、「可算名詞の不可算名詞化」を見ていこう。この現象は、石田 (1998) が次の3つの可能性を例示している。初めに、1つの完結した個体が何らかの外的エネルギーを受けて、結果的に元々の個体としてとらえられない状況に変化する場合の例を、次の例文を参照しながら見ていく。

- (1) After I ran over the cat with our car, there was cat all over the drive way.

石田 (1998: 13)

ここでは名詞 *cat* が2回用いられているが、前者は定冠詞 *the* を伴って可算扱い、後者は無冠詞で不可算扱いとなっている。石田 (1998) によれば、前者の *cat* は車に轢かれる直前の、猫として形を成していると認知されているのに対し、後者の *cat* は車に轢かれた後の、生きている時の原形をとどめない、いわば肉の塊と化した状況を表していると観察している。「有界性」という視点から見ると、生きている状態から、車に轢かれて死んで肉の塊となったという変化が、有界的視点から非有界的視点への変化、つまり可算名詞から不可算名詞へ転じたという説

明をしている。この例文では、「有界性」という観点から言えば、猫の生死よりも、猫が車に潰されて「原形をとどめていない」という点が可算、不可算の判断基準になっていると思われる。これは例えば、猫が「病気で」死んだ、というように猫の原形そのものに物理的変化が起こらない場合は、「有界性」という観点は適用されない。つまり(1)のような可算、不可算の交替が起こらないだろうと推測される。次の例を見てみよう。

- (2) a. Her house smells of dogs.
 b. This room smells of cat!
 (石田 1998: 15)

石田(1998)によれば、(2a, 2b)は「連続体化によって可算名詞の不可算名詞化が生じた例」として、次のように説明している。すなわち、dog, catはいずれも一般的に可算名詞として扱われるが、(2a)は「(複数)の犬の臭いがする」ことを意味し、たとえ多数ではあっても個体としての「犬」の存在はまだ認知可能な状態であるが、(2b)は個体の存在が意識に上らないほど「猫の臭いが充満している」というものである。石田(1998)はこの場合、犬、猫が個体として認知可能かどうかによって可算、不可算が判別されると説明しているのだが、この個体の認知が英文の意味解釈にどのような差異をもたらしているのだろうか。我々日本人のような英語母語以外の話者が(2a, 2b)の意味の差異を判断することは、かなり難しいだろう。筆者の直感では、「臭いの程度」の違いではないかと推測する。石田(1998)は(2b)について、「臭いが充満している」状態と説明しているが、不可算名詞を用いる表現は、臭う場所と臭わない場所の境界がないほどの状況を表しているのではないかと考えられる。そこで、ある英語母語話者にこの2つの英文の意味的差異⁴⁾を確認したところ、(2a)は既にその場所に犬という個体の存在はないが、おそらく(比較的高い確率で)「犬の臭い」であることが認知できるというのに

対し、(2b)は既に個体の存在(この場合は猫)がないという点では(2a)と同じであるが、臭いの原因が猫であることを断言できる、という興味深い認知の違いが指摘された。この連続体化が起こる環境が、対象の置かれている状況の程度の違いを示すのであれば、石田(1998)が次に例示する(3a, 3b), (4a, 4b)も、対象の置かれている程度の違いについて、不可算名詞を用いた連続体化によって表していると言えるだろう。

- (3) a. A group of boys were playing football in the street.
 b. There's too much boy in the bathtub.
 (4) a. The apples are full of worms.
 b. I've been collecting worm for fish bait.
 (石田 1998: 16)

不可算名詞された(3b)のboy, (4b)のwormは、石田(1998)によればそれぞれ「いもを洗うように、あるいは立錫の余地もないほど男の子がいる」、「虫が互いに絡み合ってしまうほど集めてきた」ということを意味しているという。以上、これまで見てきた(2a, 2b), (3a, 3b), (4a, 4b)は、不可算名詞を用いた場合には、「臭い」や「密集」の程度が高まっていることを示している。なお検討の余地はあるが、これまでの例を見る限り、1つの可能性として、連続体化と程度の高まり(あるいは拡大)の比例関係⁵⁾にあると言える。次に対象を抽象化することによる「可算名詞の不可算名詞化」の例を見ていこう。石田(1998)はこの例を、「有界的な存在としてとらえられるものであることを表す可算名詞が、具体的な対象を指示する機能を失う一方で、スキーマ(schema)を表象するものとして再解釈され、最終的に不可算名詞の形で用いられる場合を意味する」⁶⁾と説明する。以下に例文を示す。

- (5) a. Cars were parked on both sides of

the road.

b. Car is the best mode of transport.

(石田 1998: 18)

石田 (1998) によれば, (5a) の Cars は日本語で「台」という単位を付けて数えられる有界的な存在としての「自動車」を表しているのに対し, (5b) の Car は抽象度の高い「自動車というもの」を意味しており, 話者の関心は, もはや具体的な形を持った自動車ではなく, 自動車を提供する機能や用途といった側面へと移っている, としている。ただし, 石田 (1998) はこの抽象化を進めた結果としての「スキーマ」としてとらえることに対して, Taylor (1995) の主張を引き合いに出しながら, 「議論の余地が多く残されている」ことを同時に認めている。

以上, 石田 (1998) の「可算名詞の不可算名詞化」が起こる 3 つの可能性の基準, すなわち, (A) 可算, 不可算の判別の対象となる名詞が, 何らかの物理的変化を被ることでその後「原形」を保っているかどうか, (B) 「連続体化」が適用可能かどうか (C) 「抽象化」が適用可能かどうか, を見てきた。これら 3 つの基準に共通して見られるのは, 対象となる名詞が持つ「個体」としての特徴が, 前述の (A), (B), (C) のいずれかの影響を受けて特徴が曖昧化されることにより, 結果的に不可算名詞と認定されるということであろう。ここで確認しておくべきことは, 意味的にも, 対象となる名詞の本質的な特徴を消失させるまでは至らないということである。このことは, ある意味で当然のことかもしれないが, 本節で取り上げてきた「可算名詞の不可算名詞化」という操作において, 大枠として「対象となる名詞の本質的な特徴が消失するレベルまでは適用されない。」と仮定できるのではないかと考えられる。換言すれば, この操作の適用前後でも, 名詞の本質的な特徴や意味は変わらないと考えられる。次節では, 「有界性」について石田 (1999) が更に踏み込んだ判断基準を提示するものを概観する。

2 石田 (1999) における「有界性の判断基準」について

石田 (1999) は, 「有界性」を規定する次の 6 つのパターンを提案している。

- (i) an area of
- (ii). a period of
- (iii). an event of/occasion of
- (iv). an instance of
- (v). a kind of
- (vi). a unit/serving of

(石田 1999: 27)

石田 (1999) は上記の判断基準について, 「(i) は「境界線によって仕切られた」という「有界性」を持つ性質を典型的に表すプロトタイプであり, (ii) から (vi) までは概ねそこからの拡張あるいは比喩的な派生という過程を経ることによって得られる判断基準を示している。」と説明している。本節では石田自身も各タイプの説明のうち最も紙幅を費やしている「(iv) an instance of」を特に取り上げてみていくことにするが, それに先立ち, 各パターンの基本モデルである (i) を参照する。

2.1 基本パターン (i) an area of について

石田 (1999) はこのパターンを, 「2次元の平面上もしくは3次元の空間において, 当該の名詞が表している対象を, 話者が心の中で境界線を引くことができる存在として認識しているときには, 「有界性」のプロトタイプ的な判断基準である an area of にしたがって解釈できるということである」と説明し, 次の例を提示している。

- (6) a. The satellite has been in (outer) space for a year.
- b. There is space for three cars in this garage.
- c. Is there a space for the car in the

firm's car park?

(石田 1999: 28-29)

(6a-c) で判断対象となる名詞は space である。例文全体からくみ取れる意味を考慮しても、(6a) の space は「宇宙」という意味、(6b, c) の space は「空間」という意味として捉えられることは比較的容易なことだろう。(6a) の場合は少なくとも、宇宙は今も拡大し続けているという一般的な常識と照らし合わせても、境界線を有しないと解釈できる。では (6b, 6c) はどうだろうか。この場合、不定冠詞の有無により判断対象 space は (6b) が不可算、(6c) は可算というそれぞれの扱いとなる。確認として、(6b), (6c) の space は、自動車を駐車するための「空間」という意味としては共通である。それでは、(6b) と (6c) の space を可算/不可算とする判断基準はどのようなものだろうか。石田 (1999) の説明によれば、特に (6b) には「余裕」という意味が含まれており、この「余裕」について「融通無碍に形状を変化させる性質を有しており、心理的に境界線を引くことが困難であるために、非有界的なものとしてとらえられていると考えられる。」としている。この説明に従って筆者自身の解釈を試みるならば、発話者にとっては (6c) は少なくとも自動車 1 台が確実に駐車できる「空間」に視点があるのに対し、(6b) はあくまで自動車が 3 台 (ほど) 駐車できる「空間」であり、発話者の視点は実際に 3 台の自動車を駐車可能かどうかということよりも、それほど空間としての広さを表現することに視点を置いていると考えられる。したがって (6b) では、話者は「自動車 3 台分が駐車できる程度の空間」という大枠での有界的な認知をしているのであり、具体的に自動車を 3 台駐車するかどうかは別の問題であると見るのが妥当であり、認知の結論として、不可算名詞としての space ということになるだろう。

このように、石田 (1999) が提案する「有界性」の判断基準の 1 つである an area of を適用しての名詞 space を観察した。石田 (1999) も

述べているように、ここで取り上げた判断基準 an area of は他の 5 つの判断基準の基本モデル (プロトタイプ) であることから、「有界性」を判断する境界が比較的是っきりと認知できると言える。さて、次に (iv) an instance of という判断タイプを見ていくが、これは他の 5 つのパターンと比較して、その意味合いが若干分かりにくい印象がある。このことは既述の通り、石田自身もそのパターンの説明に最も紙幅を費やしていることからくみ取れる。

2.2 (iv) an instance of というパターンについて

“instance” を英和辞書で見ると「場合、事実、例 (例証)」という意味が確認できるが、「有界性」という視点からこの判断基準パターンとしてはどのような意味を表しているのだろうか。石田 (1999) によれば、例えば (ii) a period of という判断基準パターンが含意する「はじめがあり終わりがある」という感覚の有無にかかわらず、

名詞が表している対象の個別性、具体性に注目することによって、「有界性」が持っている「境界線によって仕切られた」という特質を当該の名詞に適用することが可能であるかどうかを表すものである。

(石田 1999: 36)

と説明する。つまり、「有界性」という他との境界を、「個別性・具体性」という観点に結び付けると考えられる。そしてこれを具体化するために、「抽象から具象へ」と「物質から物体へ」の 2 つのケースの例示をしている。それぞれのケースについて、石田 (1999) の付す説明とともに概観する。

- (7) a. I find German grammar very difficult.
b. I want to buy a French grammar.
- (8) a. These modern planes can fly faster than sound.

b. I couldn't hear a sound.

(石田 1999: 37)

石田 (1999) は上記の (7a, b), (8a, b) を「抽象から具象へ」という変化として説明する。すなわち, (7a) の grammar, (8a) の sound はそれぞれ「文法」, 「音」という抽象的な意味内容を表すのに対し, (7b) の不定冠詞 a を伴う grammar は可算名詞として「文法書」という解釈となり, (8b) の同様に不定冠詞 a を伴う sound は可算名詞として, 「物音」という解釈となると説明している。この石田 (1999) の説明では, (7a, b) の違いは容易に理解できても, (8a, b) の違いには曖昧さを感じてしまう。そこで石田 (1999) はこの点について, 次のような補足をしている。

「ガタッ」といったような物音は, 多少なりとも時間的な幅が感じられるものであり, 個別的・具体的な場面で聞くことのできる抽象性の低い有界的な存在として認識されるため, このように可算名詞の形として言語化されると考えられる。

(石田 1999: 38)

石田 (1999) はこの「抽象から具象へ」という判断基準に関して, 次の2点のような注意を促している。

- i) 「有界性」の問題は対象の物理的な大きさや外見的特徴のみによって客観的に決定されるわけではない。
- ii) 具象と言っても, はっきりと目で確認できる可視的な存在でなければならないということの意味するわけではない。

(石田 1999: 39)

石田 (1999) は i) について, 名詞 bread を例に説明している。すなわち, 一般的に bread は不可算名詞として用いられるが, 例えば「パンの種類」を強調する場合には, “many different

bread” のように可算名詞として扱われることを指摘している。つまり, bread そのものの性質のみによって「可算/不可算」が決定されるわけではないということになる。このことは, 同様に一般的に不可算名詞として扱われる fruit, sport にも見られる。ii) について, 石田 (1999) は名詞 education を例に説明している。education は一般的に「教育」という概念的なものを示す単語なので, 非有界的なものとして不可算名詞によって表されるところとしている。しかし, 「個人に対する教育」や「優れた教育」など, 一般的な概念から「個人に対する」や「優れた」などと具象への方向へと導く形容詞類が付くと, 可算名詞として解釈されうることを指摘している。これらのことは, 「抽象から具象へ」という視点の流れは名詞それ自体の性質のみによって決定されるのではない, ということを示していると言えよう。

それではもう1つのパターンである「物質から物体へ」について, 同様に石田 (1999) の付す説明とともに見てみよう。なお, こちらの方が先に概観した「抽象から具象へ」というパターンよりも, 理解が容易であるという印象を受ける。石田 (1999) は次の (9a, b), (10a, b) の例文を提示して説明を与えている。

(9) a. The wall was of concrete, forced with stone.

b. He threw a stone at the dog.

(10) a. Iron rusts easily.

b. My mother uses an iron to press my cotton shirts.

(石田 1999: 41)

石田 (1999) によれば, (9a) の stone, (10a) の iron はともに「物質としての石」, 「物質としての鉄」という意味解釈がなされ, 非有界的なものとして不可算名詞と判定されるところとしている。一方で, (9b) の stone はこの場合「物体としての石」, (10b) の iron は「電化製品としてのアイロン」という有界的な意味解釈がなされ, 可

算名詞として判定されるとしている。(9a, b)の例はまだ若干分かりにくい印象であるが、(10a, b)については「有界/非有界」の違いがその用途、つまり(9a)のironは用途そのものが判然としないのに対して、(10b)のironは「衣類のシワを伸ばすための電化製品」という具体的な用途をもった名詞というのは明らかである、ということから、(10b)のironを可算名詞として扱うのは疑う余地がないと言えるだろう。石田(1999)はさらに、(10a, b)に近い例として、paperを対象とする次の例示をしている。

- (11) a. She thought some Japanese houses were built with paper.
 b. This is an English paper.
 c. I have to write a paper about volunteer work.

(石田 1999: 42)

石田(1999)によれば、(11a)のpaperは「素材としての紙」を意味し、一般的に非有界的なものと思われ、(11b)のpaperは「新聞」、(11c)のpaperは「レポート」をそれぞれ示し、この時点で単なる「紙」という意味からそれぞれ「新聞」、「レポート」のように意味の転化が起こったために、「有界/非有界」という観点にも転化が生じて、結果的に可算名詞として見なされるというものである。この例も既述の(10a, b)のironのように、その変化がとらえやすいと言えよう。

ここまで、石田(1999)の提示する「有界性」に関する6つの判断基準パターンのうち、そのプロトタイプとなる(i) an area ofと、他の5つのパターンと比較してその抽象度が高いと思われる(iv) an instance ofについて取り上げた。石田(1999)は基本的に「有界性」判断基準として、「対象の名詞とそれを取り巻くものとの間に、境界として認知しうるものが存在するかどうか。」という観点で、対象となる名詞が可算なのか不可算を決定しようと主張している。

繰り返しになるが、an area ofというパターンはまさに境界の有無があるのかどうかを判断する、いわば最も基本的なパターンであり、その境界の位置づけをより具体的にしているのが(ii)–(vi)の各パターンということになる。ただし、(iv)については他のパターンに比べて説明を要することがあり、事実、石田(1999)においても紙幅を割いている。ここでは、「抽象から具象へ」と「物質から物体へ」の2つの下位レベルパターンが示されているが、前者の「抽象から具象へ」という転化が、対象となる名詞によってやや理解しづらい面も見られる。

3 本稿のまとめと今後の研究に向けての展望

英語の名詞が持つ特徴である「可算/不可算」の決定要因について見てきたが、それらが実際に使用されている場面では、辞書的な「可算/不可算」の判別と、話者あるいは聴者の認知的判断とは必ずしも一致しないというのが本稿の出発点となっている。これは端的に言えば、一般的に物質名詞などと称され、不可算の扱いを受ける名詞が、その使用場面によっては可算と見なされることがあるということである。石田(1998, 1999)では、対象の名詞の実際の使用場面における「可算/不可算」の判定基準として「有界性」という視点を提案し、それに基づく具体的な判断を本稿第1節で見た「可算名詞の不可算名詞化」や、第2節で見た(i)–(vi)の6つの判断基準パターンを参照しながら具体例の説明を試みている。本稿では石田(1998, 1999)に極めて依拠する形で、対象とする名詞の「可算/不可算」の扱いがどちらになるのかについて概観してきた。

今後、本テーマについて研究を進めるにあたり、これまで概観してきた石田の知見から、今後次の点を更に検討してみたい。すなわち、

対象となる名詞の「可算/不可算」の判定を担う要素が、文全体にあるのか、あるいは文の中の一部要素がその役割を担っているのか、あるい

はこれら両方が混在するのか。

ということである。石田 (1998, 1999) は「有界性」の判断は、話者の認知の仕方によるところが大きいという視点からも、最終的には文全体の中での対象となる名詞の意味的位置づけによって決定される、という視点を持っていると思われる。筆者自身も本稿執筆段階では基本的にはこの視点に立っているが、いくつかの例については、文全体というよりも、対象となる名詞とともに文内に共起する主動詞や対象となる名詞の前後に置かれる形容詞類などが規定する意味によって、対象となる名詞の「可算/不可算」が決定される可能性があることを指摘したい。そこでこのことを検討するために、本稿で取り上げた石田 (1998, 1999) の例文の中で、次の (7a) と (7b) の比較、そして (11b) と (11c) を再度取り上げる。

- (7) a. I find German grammar very difficult.
 b. I want to buy a French grammar.
 (11) b. This is an English paper.
 c. I have to write a paper about volunteer work.

(7a), (7b) を比較してみると、(7a) の find の目的語である German grammar は「ドイツ語文法」という意味で、これ以上の意味の拡大的解釈はない。これと比較して、(7b) の buy の目的語である French grammar は、「フランス語文法書」という意味解釈⁷⁾ になり、「書」=「書籍」を指すために可算名詞と見なされる。この例において、動詞の目的語が可算か不可算を決定しているのは、「対象名詞を目的語として取る動詞の意味」と考えられる。(7b) を例にあらためて考えてみると、対象名詞を目的語として取る動詞 buy は、「買う」ことができる対象は基本的に物質として形を成しているものでなければならない。したがって、概念としての French grammar を買うことはできないので、その概念が書

かれた「書籍」という物質的な形を成したものを目的語として要求するのである。このことを例証するために、(12a), (12b) の例文を提示する。

- (12) a. I want to know German grammar.
 b. I want to write a French grammar.

(12a) は、発話者が概念としての German grammar を知りたいという意味解釈となり、(7a) の German grammar と意味的に同値であると見なすことができる。他方、(12b) は発話者が書きたいのはフランス語文法という概念をまとめた「書籍」という意味解釈となり、(7b) の French grammar と意味的に同値であると見なすことができる。次に (11b) を見てみよう。石田 (1999) の説明によれば既述の通り、ここでの paper の意味は本来の「紙」から転化して「新聞」あるいは「試験(用紙)」を表すと説明している。しかし、このことについてはその意味解釈に若干の疑問が残る。それは、“English paper”を「イギリスの(あるいは、「イギリス製の」紙)」ととらえる意味解釈の可能性は全くないのだろうか、ということである。既述の通り、(11b) は「英字の新聞」とか「英語の試験」などのように、paper の本質的意味から転化した形ととらえるのが妥当だろう。しかし、もし「イギリスの(イギリス製の)の紙」という本来の意味に近い意味のとらえ方が可能ならば、paper を可算/不可算のうちどちらとして見なすかについては、再考の余地が残されていると考えられる。ちなみに、“English paper”を Google (Google) サイトで検索してみると、不定冠詞 an がある場合とない場合の両方が結果として出力された。そして最後に (11c) を見てみよう。この例は対象名詞に後続する前置詞句 about volunteer work によって、対象名詞の意味が規定されると見なされるものである。この例文では、文内の他の要素(主語、主動詞など)を他のものに置きかえたとしても、対象名詞 paper が含意する「レポート」という意味は変化

しないということが予測できる。

これまで見てきたように、ある名詞の「可算/不可算」のどちらとして取り扱うかについては、辞書の定義はあくまでも1つ基準に過ぎず、本稿にて石田(1998, 1999)を概観してきたように、その名詞を含む文全体の中での解釈によるところが大きく、それは英語話者の「ものの見方」によって規定されるということが言える。今後は特に、名詞の「可算/不可算」の決定が文内のある要素によって規定される、という仮説を基に研究を進めていきたい。

注

- 1) 例えば、高校生向け英語学習参考書『総合英語 Forest: 第6版』桐原書店, 2009: p. 454)では、可算名詞を「数えないと使えない」、不可算名詞を「数えてはいけない」と定義し、「これらは強制的な規則だと思った方がいい」と説明している。
- 2) 「第二言語」とは、一般的に「母語である第一言語をある程度習得した後に、学習することによって習得される母語以外の言語」と定義されている。我々日本人の場合、基本的に、第一言語は日本語であり、第二言語はほとんどの場合は英語と見なしてよいであろう。
- 3) ここで取り上げた例について、石田(1998: 12)において coffee を例として同様の説明を行っている。石田は「実際には、可算名詞と考えられているものが不可算名詞の形で使用される例は、食材を中心に観察ができる。」ことを指摘している。
- 4) 例文(2b)について、この英語話者は最初にこの例文を見た時は「奇異な感じがする。」とのことだったが、少し間をおいて考えた後に本文にある見解を示した。今後の課題として、(2b)の英文自体としての「容認可能性(acceptability)」を検討する必要があるかもしれない。
- 5) 石田(1999: 16)において、「外界の状況とは関係なく、話者自身が主体的に隙間を埋め込むという認知的操作を行ない、有界的な存在である個体の大きさを極小化させ、さらには融合あるいは消失させることによって、不可算名詞の形での表現が保証されるからである。」との説明を行っている。この見解を支

持すれば、少なくとも「融合」という認知的操作を行えば個体よりも密度の面では大きくなり、結果それが「程度」にも反映されるということを仮定している。

- 6) 詳細については、石田(1998: 17-18)を参照のこと。
- 7) (7b)について、石田(1999)では容認可能(acceptable)な文として扱われているが、筆者がある英語話者に確認したところ、(7b)の French grammar はあくまでも形容詞的であり、やはり book という名詞がないと英文として曖昧であるという見解を示した。ちなみに筆者が作った(12b)も同じ見解を示し、「曖昧さ」という点では(7b)と(12b)は同じ程度とのことだった。このことから、(7b)については、文としての「容認可能性(acceptability)」の確認も今後の課題の1つの見えそうである。

参考文献

- (論文・著書)
- 石田秀雄(1998)「可算名詞の不可算名詞化」『大阪教育大学英文学会誌』第43巻, 11-24項。
 ———(1999)「有界性の問題—可算名詞と不可算名詞の区分に関わる認知的基礎—」『大阪教育大学英文学会誌』第44巻, 21-53項。
 ———(2002)『わかりやすい英語冠詞講義』, 大修館書店。
- 織田 稔(2002)『英語冠詞の世界—英語の「もの」の見方と示し方』, 研究社。
- 影山太郎(2002)『ケジメのない日本語』, 岩波書店。
- 西田一弘(2005)「英語における抽象名詞・普通名詞の分類に関する問題点」『愛知産業大学短期大学部紀要』第18巻, 143-162項。
- マーク・ピーターセン(1990)『続 日本人の英語』, 岩波書店。
- Reid, Wallis (1991) *Verb and noun number in English: a functional explanation*, Longman.
- Taylor, John R. (1995) *Linguistic categorization: Prototypes in linguistic Theory* (2nd ed.), Oxford University Press.

(参考書・辞典)

- 石黒昭博 他(2009)『総合英語 Forest (フォレスト) [6th edition]』, 桐原書店。
- 綿貫 陽, マーク・ピーターセン(2006)『表現

のための実践ロイヤル英文法』, 旺文社. 版』, 美誠社.
和田吉剛 (2005) 『アットウィル総合英語 [改訂